



戦争と平和について考える

校長 新井 篤志

夏休みに入ってからでも気象庁が災害といってもよいという猛暑が続くなか、西日本豪雨にはじまり激しい雨の降り方も日本全国で発生しています。また、台風も次々に日本列島にやって来て、自然災害に対する危機管理意識を今まで以上にもつ必要を感じさせられたこの夏です。夏休みが終わり、子どもたちの学校生活が始まりました。特に、暑さ対策には引き続き留意をしながら教育活動を行っていきたいと思います。

今年が平成最後の夏休みとなりました。8月は広島・長崎の原爆投下や終戦など先の大戦の中でも大きな出来事が起きた月でもあります。中村草田男氏が「降る雪や 明治は遠く なりにけり」と昭和のはじめに句を詠みましたが、戦後生まれが総人口の8割を超えるようになった現在は、「昭和は遠く なりにけり」といえるかもしれません。それだけに戦争のことを風化させないように後世に伝えていこうという活動も多く見られます。最近では戦争の悲惨さを戦争の様子そのものを取り上げて伝えていくことのほかに、戦争を当時の人々の生活の様子から伝えていくものも見られます。アニメで話題になった『この世界の片隅に』や漫画の『戦争めし』などがその例といえるでしょう。

その中で、戦争で親を亡くして駅で寝泊まりして過ごす子どもたちのドキュメンタリーを見る機会がありました。戦後の日本の様子(駅の子の様子)を映し出していましたが、それを見ると本当に戦争は終わったと言えるのかという思いが湧き上がってきます。当時の子どもだった人の言葉に「だれか一人でも声をかける人がいたら……。周りの人はどうしてこうした子どもたちがいるのかを知っているにも関わらず……。社会は冷たい。」というのがありました。人々に周りのことまで気を配る余裕をなくさせてしまう時代になっていたと言えるのでしょうか。戦争は戦いだけでなく、戦いが終わったのちにも人々の心の中や生活に様々な影響を与えることを教えていると思いました。

戦後生まれが8割を超える今、あらためて戦争のことを後世に伝えていく意味を考える時期に来ているかと思います。映像を見たり当時の人々の話を聞いたりすることは私たちが戦争の追体験をすることになります。特に、戦争が引き起こす様々な事柄を知ることが、これからの平和な世界を築いていくためにはどうしたらよいのかを考え、英知を生み出していくヒントになると思います。戦争に限らず、過去(歴史)から学ぶことは未来を創造するために大切にしていきたいことの一つと考えます。